慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.164- 165
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0164

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

鈴木　正崇

最初に小冊子ながらも専門書に近い本書の複雑な論旨を読み解いて、様々の問題を指摘し、今後の課題を提示して頂いた神田より子さんに御礼申し上げる。「熊野と神楽」という主題での書物は、これまでに類書はなく全くの新しい視点である。本書は、熊野信仰の考察を主体に、従来の研究成果に基づいて、聖地の根源的力や信仰の変遷を解き明かす一方で、これまで曖昧に論じられてきた熊野と神楽との関係を明確する試みに挑戦した。熊野の現地では神楽は失われて久しく、各地に断片的に残る熊野との交流や展開が手がかりとなる。根源には、熊野信仰がなぜ日本の隅々に広く伝播したのかという問いがあった。

基本的な立場は、熊野信仰の原型や祖型に遡行したり、本質は何かを探究するのではなく、変化の過程に焦点を合わせ、民衆の側での創造的読み替えを主題とした。具体的には、文献史料に基づく縁起と、儀礼実践としての湯立を取り上げ、神楽へ展開する動きを追いかけた。その過程で、熊野信仰を各地に展開した山岳信仰や修験道との関連に注目したことも特色である。考察にあたっては、歴史文献だけなくフィールドワークの成果も取り込んで検討したが、地域的な偏りもあり十分でないことも多い。

本書に関しては幾つかの特色がある。第一に、本書は国文学資料館の叢書であるブックレット「書物をひらく」のシリーズとして刊行された。末尾に収録されている発刊の辞にもあるように、本シリーズは書物の過去の知を現在に生きる知として復権することが意図されている。従来、近代以前の書物である古典籍の研究は、文学・歴史学など人文系の限られた分野に限定されてきたが、急激な IT 化で状況は一変し、多くの人々が原史料に容易に接することが出来るようになった。国文学資料館は、所蔵文書をデジタル資料として公開し、画像のデータベースを構築して、古典籍をより身近な研究資源として活用する試みを開始した。研究者に関しても、国内外を問わず研究者の交流を盛んにし、共同研究を推進して新しい知見を発表する道筋を切り開こうとしている。従って、本シリーズでは、国文学資料館を初めとしてデジタル資料として公開されている史料・絵図・絵巻物などを、本書の中で積極的に使用して、これらを利用して何が出来るのかという研究の可能性を広く一般の人に示すことが求められた。多くの図版を収録し、注の内容も詳しく充実させることが要請された。書物としての発刊と共に kindle 版も刊行されている。本シリーズは、本来は、高校生を対象として若い人にも理解しやすくという要請もあった。要請の総てに答えることは難しかったが、かなりの努力をしたのである。

第二に、本シリーズは紀州を対象として考察するという条件があった。研究の基盤にあった

鈴木正崇「著者リプライ」
『三田社会学』第 24 号（2019 年 7 月）164-165 頁

のは、大橋直義氏を中心とする紀州地域学共同研究会であり、研究成果を刊行するという趣旨があった。しかし、紀州という地域研究の核組はあるが、熊野信仰は紀州を発祥の地としつつも、全国に広がっており、なぜ各地で受け入れられたのか、熊野の聖地としての根源的力がどのように各地に作用したかという観点は重要である。企画の要請を逸脱したかもしれないが、地域の枠組みを越えて、聖地の在り方を考え直すことを意図した。

本書の成り立ちにあたっては、偶然性が強く働いた。当初は一般向けということもあって、「聖地・熊野の真髄」として熊野の歴史や紹介をする予定であったが、最終段階で概説を書くことを中止し、最新の研究成果を世に問う野心的試みに転換した。基本は二本の論文で、アメリカとイスラエルの大学で開催されたシンポジウムで発表されている。本書は一般読者向けの外観を装いつつ、専門家向けに書かれているが、筋道は通したつもりである。ただし、本書の主軸である熊野と神楽の関係は完全に解明されたとは言えないし、縁起に関しても熊野と彦山との比較検討は本書が初めて、位置付けは流動的である。後半の主役である切目王子は正体不明の部分があって先行研究がほとんどなく、大元神楽や石見神楽への切目王子の展開も研究は皆無に近い。更に、奥三河の花祭と熊野との関係は、五来重氏の研究以来、多くの人が示唆してきたが、決定的な考察には至っていない。全体の主題を一般化して言えば、神楽と修験道のテーマともなるが、十分に展開したとは言えない。実は本書には課題が山積みなのである。文献史料を多く使用し、歴史的考察を取り込んだが、史料解読には問題もあろう。定説になっていない事象を数多く取り上げて、問題提起をした問いかけの書が本書であり、多くの方々からの批判的意見を求めたい。

著者は、『山岳信仰―日本文化の根源を探る』（中央公論新社、二〇一五年）の刊行以来、研究の比重を海外から日本に移行させてきた。基本的な立場は文化人類学にあるが、国文学・日本史・美術史・宗教学・民俗学・神話学などの分野を越えて、文献の解読も含めて、日本文化の根底にあるものの解明に取り組んでいる。日本国内にも異文化研究は存在するという発想があり、日本研究を行っていてもどこかに海外との比較の視点がある。

今後も研究は継続していくであろう。異分野の研究を繋ぎ合わせることで新知見の発見を生み出せるような試みを、試行錯誤を含め続けていきたいと考えている。改めて、新しい挑戦への意欲を生み出す原動力となる書評を書いて頂いた神田さんに御礼を申し上げたい。

（すずき　まさたか　慶應義塾大学名誉教授）